

# 化学物質の環境リスクの低減

～ダイオキシン類等の有害物質による環境負荷の低減～

## 化学物質の排出量

### 【重点目標の達成状況】

#### ■PRTR法対象物質の総排出量

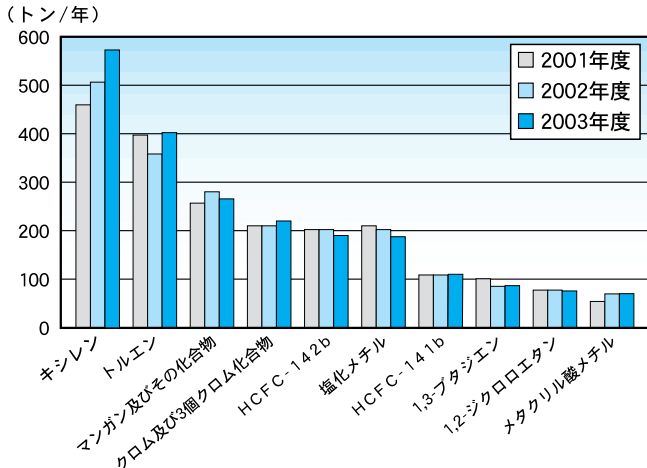
【目標：2001年度を基準年度とし、2006年度までに30%削減】

排出総量は2,628トン(2003年度実績)であり、2001年度実績の2,927トンに比べて10%減少

(市内214事業所から届出された物質は、法対象354物質のうち116物質)

1999年7月に公布された「特定化学物質の環境への排出量の把握等及び管理の改善の促進に関する法律」(PRTR法)に基づき、対象事業者は、人や生態系に有害なおそれがある対象物質の前年度の環境への排出量及び当該事業所の外への移動量について市を經由して国へ提出することが2002年度から義務付けられています。

市内事業所から環境への排出量上位10物質



### ※ PRTRとは

人や生態系に有害なおそれのある多種多様な化学物質が、どのような発生源から、どれくらい環境中に排出されたか、あるいは廃棄物に含まれて事業所の外に運び出されたかというデータを把握し、集計し、公表する仕組みです。

## 内分泌攪乱化学物質

市では、内分泌攪乱化学物質問題の取組の一つとして、環境省がリストアップした65物質を対象に、平成10年度から調査を開始し、平成16年度は大気(4地点)13物質、水質(12地点)16物質、底質(8地点)19物質を調査しました。

### ■調査の概要

- ◇大気10物質、水質5物質(河川5物質、海域1物質)、底質11物質(河川8物質、海域11物質)が検出されました。
- ◇予測無影響濃度が定められているノニルフェノールと4-tert-オクチルフェノールについては、すべての調査地点でその濃度を下回っていました。

※内分泌攪乱化学物質とは、動物の生体内に取り込まれた場合に、本来、その生体内で営まれている正常なホルモン作用に影響を与える外因性の物質をいう。  
 ※予測無影響濃度：魚類に対し内分泌攪乱作用の影響がないと予測される水中濃度

## ダイオキシン類

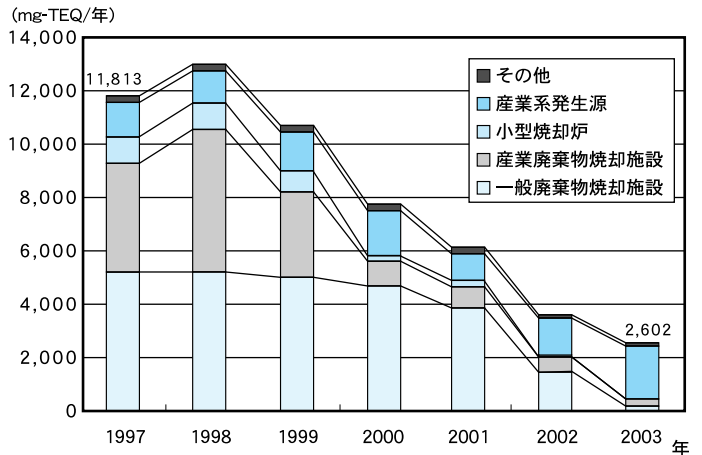
大気、水質、土壌等におけるダイオキシン類環境調査の結果、すべての地点で環境基準を達成しました。【目標：達成率100%】

市内における環境濃度調査結果

調査対象	地点数	2004年度調査結果		環境基準	
		平均値	濃度範囲		
大気	一般環境	3	0.050 pg-TEQ/m <sup>3</sup>	0.042 ~ 0.057	0.6 以下
	処理センター周辺	32	0.044 pg-TEQ/m <sup>3</sup>	0.033 ~ 0.064	0.6 以下
公共用水域	河川	8	0.17 pg-TEQ/L	0.082 ~ 0.39	1 以下
	海域	5	0.17 pg-TEQ/L	0.075 ~ 0.36	1 以下
	河川	3	1.9 pg-TEQ/g	0.49 ~ 3.0	150 以下
	海域	5	28 pg-TEQ/g	17 ~ 41	150 以下
	地下水質	3	0.065 pg-TEQ/L	0.065 ~ 0.065	1 以下
土壌	12	3.2 pg-TEQ/g	0.065 ~ 20	1000 以下	

大気及び公共用水域へのダイオキシン類の排出量は、ダイオキシン類対策特別措置法が施行となった2000年以降、年々減少しており、2003年の排出量は1997年の排出量と比べ78%減少しました。

市内におけるダイオキシン類の排出状況



## パンフレット「化学物質と環境について知ろう」を作成しました!

「身の回りの化学物質にはどんなものがあるのか」「川崎ではどのくらい化学物質が環境へ排出されているのか」「化学物質の人や動植物への影響について」「環境汚染を減らすためにできること」など、化学物質に関してのよくある質問・疑問の答えを載せています。これをお読みになり、化学物質と環境について理解するきっかけにしてください。

